

〔魂の配慮〕

聖書翻訳記念日^{*}

浜島 敏[†]

聖句

世にはいろいろな種類の言葉があり、どれ一つ意味を持たないものはありません。だから、もしその言葉の意味が分からないとなれば、話し手にとってわたしは外国人であり、わたしにとってその話し手も外国人であることになります。

（コリント信徒への手紙 一、一四章一〇——一一節、新共同訳）

先日の日曜日六月一二日は、教会暦ではペンテコステと呼ばれる大切な祝祭日でありました。クリスマスやイースター

^{*} 本稿は二〇一一年六月一五日の本学のチャペルにおいて話した内容を『論集』〔魂の配慮〕として原稿にしたものである。
[†] HAMAJIMA, Bin 本学名誉教授

は教会に行ったことのない人でも、名前くらいは聞いたことがあると思いますが、ペンテコステと言う名前はほとんど知られていません。が聖霊が降った日であり、教会の誕生したとされる大切な記念日であります。この日の出来事は使徒言行録の二章に書かれていますので、後ほどお読み下さい。当時の世界中から集まっている人たちが、それぞれ自分の言葉で福音が語られるのを聞いたと書かれています。私は、ペンテコステを勝手に「聖書翻訳記念日」と呼んでおります。もともとペンテコステは麦の収穫を感謝する収穫祭ですが、ユダヤ人はこの日を「律法授与日」とも考えていました。過越にエジプトを脱出し、五〇日目にシナイ山で律法を授かったというのです。いかにも聖書翻訳の記念日として相応しいように思います。

律法はヘブライ語で与えられました。そしてそれは基本的にユダヤ人のためでした。旧約聖書の翻訳がなかったわけではありませんが、それはヘブライ語が分からなくなってしまったユダヤ人のためでした。ところが、福音は全世界の民に与えられるべきものです。そこでペンテコステの祭のために、当時の全世界から集まってきた人たちに、それぞれ自分の理解できる言葉で福音が語られたというのです。聖霊による聖書翻訳と言えらると思います。（余談ですが、使徒二章九―一節に上げられている地名はローマを除いて、全て現在の「正教会」のある地域です。初期のキリスト教は、東方で有力でした。）

もし聖書をヘブライ語やギリシア語でしか読むことが出来ないとすれば、ここにいらつしやるほとんどの方はクリスチャンになるどころか、福音そのものも聞く機会がなかったかもしれません。私たちが自分の言葉で聖書が読めるということは大変ありがたいことなのです。世界には約六五〇〇の言葉があります。もともと、言語の数は私たちが思うほど簡単ではありません。お互いに通じる範囲であれば、方言と考え、通じなくなったら別の言語と考えれば良さそうですが、必ずしもそうではありません。中国語は北京と上海では、そのままではお互いに理解できません。しかし、それらは方言とされています。一方、ノルウェー語とスウェーデン語とか、インドネシア語とマレーシア語は、それぞれ自国の言葉を話してもお互いに通じます。以前、本学にスペイン語話者であるウルグアイからの留学生とポルトガル語を話すブラジルからの留学生が同時に在学していたことがあります。彼女らはそれぞれ自分の言葉を使って、お

互いにコミュニケーションをとっていましたが、それほど困難ではなかったようです。また彼女がルーマニアのニュースをテレビで見ている、「先生、大ざっぱな内容は分かります」と言っていたのも記憶にあります。同じラテン系の言葉です。方言年代学という学問では、ヨーロッパの言語が分離した時期よりも、日本語の方言が分かれた時期の方がずっと古いとされています。単純に考えれば、ヨーロッパの言語の方が日本の方言よりも近いということになります。もちろん、それほど単純ではありません。国家と言う枠組みが変化をある程度食い止めていることもあるでしょうし、最近ではマスコミの発達が、言語を近付けていると言うこともあります。イギリスとアメリカの英語が最も違っていたのは一九世紀だったと言われています。逆に、独立したことによって、違いを強調することもあるでしょう。北朝鮮と韓国はまだお互いに理解できますが、異なった政治体制の元で、このままお互いを敵視している状態が続けば、二つの言語になる可能性もないとは言えません。

ですが、その問題はここでは置いておきまして、世界の全ての言語に聖書を翻訳するというビジョンを持っているウィクリフ聖書翻訳協会では、世界の言語数を六六六九語としています。そして、おおざっぱに言って、その中で一部分だけでも聖書の翻訳を持っているのが約三分の一の言語で、三分の一が現在翻訳進行中、そしてあと三分の一が手付かずとしています。しかし聖書は世界の全ての人に必要な本ですから、神様はいつの時代にもそのために召された人を起こして下さっています。ルターは自国民にドイツ語の聖書を与えました。イギリス人ティンダルは、ヨーロッパ大陸で聖書を英語に翻訳し、小麦袋に積めてイギリスに密輸で送り込みました。ティンダル自身は、やがて友を装ったスパイの手により裏切られ、官憲に引き渡され、投獄されてしまいました。牢獄の中でも彼は聖書翻訳を続けました。少なくともその意思がありました。ティンダルの自筆署名のある現存するたった一通の手紙は、この獄中で書かれたものです。そこには、「ヘブライ語の聖書と、文法書と辞書の差し入れ」をして欲しいと書かれています。しかし、彼は裁判の末ベルギーで処刑されてしまいました。彼の最後の言葉は「主よ、イングランド王の目を開き給え」でした。聖書翻訳のために文字通り命を捧げたのです。しかし彼が翻訳した新約聖書は、英語聖書の傑作と言われるキング・ジェームズ訳聖書の七〇%以上で、そのまま使われています。ここにも聖霊の働きがあったと言えるでしょう。今年はそのジェー

ムズ王訳聖書が出版されてちょうど四〇〇年に当たります。何月何日の出版かは正式には知られていませんが、ジェームズ王訳聖書出版公式記念日が五月二日と定められました。一六一年五月二日と言えば、日本では徳川時代の初期であり、まだ家康は生きていました。イギリスではシェークスピアが生存していました。その当時の翻訳が今なお読まれているのです。言葉も古くなつたし、また聖書の言葉に対する知識・理解も当時と比べものにならないほど進歩しています。にも関わらず、今なお読まれているのは、この翻訳の美しさ、特にそのリズムの美しさだと言われます。元になったティンダルの翻訳を聞いていたある人が、まるで天使が語っているようだと言つたと伝えられています。日本語にも一七〇年ほど前、ギユツラフというドイツ人が、日本人漂流民との不思議な出会いによつてヨハネ伝を翻訳しました。このように今なおペンテコステの働きは続けられています。

聖書が日本語で読めることの恵みを覚え、感謝したいと思います。また、そのためにたくさんの人たちの努力と祈りが積み重ねられたことも覚えたいと思います。それこそ、それらの人々の血と涙と汗の結晶です。聖書に親しんでいただきたいと思います。それこそが翻訳されたことの意味ですし、ペンテコステにおいて示された神の御心でもあります。

注

ウィクリフ聖書翻訳協会二〇一〇年九月の統計によると翻訳済み二五六五語（内聖書全巻四五七語、新約聖書全巻二二一語、聖書分冊八九七語）、現在翻訳進行中二〇二六語、まだ翻訳未着手二〇七八語となっています。

なお、同協会は二〇二五年までにすべての言語に着手することを目標に掲げています。